

卷一  
宇宙·自己

三隅美奈子

20億光年を

1キラリと名付けよう

キラリ キラリ

そんな長さで流れていくのだ

宇宙の河は

永遠など

いらぬ

一つの人生が

すでに

永遠ではないか

鳥山晃雄

柳瀬丈子

重力波

十三億年を経て

届いた時空のさざ波

何故だろう この

深く静かな興奮

柳沢由美子

宇宙の塵のような

個体が

宇宙を凌駕するほどの

思いを

抱く

山碧木やまあおき  
星ほし

膨大な

時間の無駄ではないのか

こんな

一粒が

宇宙そらを視ている

岡田道程

宇宙から眺めると

地球は

色彩の爆発だという

神なる星は

ここ、プラネット・アリス大地の惑星

寿柳裕子

宇宙ステーション

「きぼう」が

光になって

日本の夜空を

渡っていく

春野一人

銀河には一千億の太陽がある

宇宙には一千億の銀河がある

その宇宙がだね

無限近くもあるというのが

近頃の学説だよ

玉 虫

心が折れそうな時  
天を仰いで  
自分の中の  
一番太い弦を  
響かせる

福島吉郎

いらん  
いらん  
今日は  
自分も  
いらん

高橋美代子

海あり、山あり  
住み慣れた  
風土の中で  
動かざるものとして  
私は在る

水源みなもと 純

大海原に向かう  
探検家の思い引き寄せたつもりで  
仁王立ち  
小さな浴室の  
シャワーの下で

自己を

放下したい

と思う自己を

放下したい

と思う自己を

南野 薔子しょうこ

一番じゃなくても

良いという

無欲のふりで

自分を守る癖

もう 捨てなきや

黒乃 響子

金沢 詩乃

いざ

苦悩が消えたら

わたしの中身は

実は空っぽで

死にたくなつた

三好 叙子のぶこ

仰ぐたびに広がり

うつむくたびに深くなる

膨張しつづける

わたしの

宇宙

風<sup>ふう</sup>  
子<sup>し</sup>

メタンの雲  
メタンの雨  
メタンの海  
衛星タイタンは  
零下の異界

山崎  
光

七百万年前から  
終日  
人間専用車です  
お急ぎの方は  
他の惑星を

蘭  
洋子

太陽系誕生のときから  
決まっていたと  
思えば  
壮大な  
わたしの生涯

田上  
洋治

宇宙の  
ちりから  
生まれ  
ちりに帰る命  
ガッツリ生きてやる

中島さなぎ

そびえ立つ  
弱い自分を  
越えて  
頂を  
めざす

馬ま  
一呵いっか

原子からできてる  
人間に  
どうして  
「意識」が  
あるんだらう

小谷要岳

自己満足の  
頑張り過ぎは  
誰かの不幸に  
繋がる事があると  
誰かが言った

作野昌子

永遠も刹那も  
変わらない  
気がした  
春先の緩いゆる  
眠りの中で

西垣一川 いっせん

落ちては

弾む

手毬のようなわたしだ

もっと弾め

もっと空へ

戸水 忠

私とは

私に私を

語って

聞かせる

物語だ

樹 いつき 実 みのり

どけどけー！劣等感のお通りだ

ネガティブビーム！

グチグチボンバー！

ジェラシーキック！

「脳内騒音夥多」

江田芳美

よし

畑に出よう

太陽に負けず

畑に出よう

まともな人間になる



水野美智子

若いアナウンサーの  
頼りなげな  
表情がかわいい  
それに引き替え私の  
世の中舐めた顔

樹いつき  
実みのり

プライドが高くくせに  
自分嫌い  
なんてちぐはぐな  
ピカソの  
絵の女みたいだ

永田和美ながみ

私は  
何に  
なりたいのだろう  
自分以外には  
なれないのに

柴田朗子

歳を重ねても  
興味津々を貫くこと  
これが私の  
通奏低音と  
なっている

渡邊加代子

心と体

一体のようできて  
相手に内緒で  
やってみたい事が  
あるような

村田新平

言いそびれた  
感謝のことは  
謝罪のことは  
賞賛のことは  
抱えて生きる

松山佐代子

自画像を描きます  
ワンピースの大きなポケット  
なずなの花束を  
ちよつと覗かせて  
スニーカーは空の色

高橋美代子

自らのために空けた  
風穴  
広がって  
他人の  
心地よい風が吹き込む

三好叙子のぶこ

私固有の遺伝子がある  
そう知って  
なぜか誇らしく  
得心がいく  
自分というもの

漂彦龍ひょう

そんなに  
自己肯定して  
何が嬉しいのかなと  
他者を見ている自分を  
肯定している

高原郁子こうげん

「品格、品格って  
うるさいなあ」  
高原さんは  
横綱でないきん  
分からのじゃわ

芳川未朋みほう

私情を  
さしはさむ  
どころか  
私情しか  
ない

河田日出子

外見そとみも内身なかみも  
ありのままの  
自分に  
惚れよう  
話しはそれから

松山佐代子

生命とは  
このことか  
草の露の  
中の  
朝焼け

青山 司

理由はないが  
齋の字が好きだ  
中1の時覚えた  
鬱ひそは小6の時  
私ひそかな矜持

荒木雄久輝

いい年  
なのに  
何も語れない  
未熟な  
背中

静御飯

娘

妻

母

祖母になれた

後は最高の私になるだけだ

蘭 洋子

毒虫を

刺す

毒虫になって

僕は

生きてやる

石川珉珉

録音をすると

自分が

全部見える

きつい声

自信のない声

佐藤沙久良湖

引き立てて

もらうたび

しり込みしている

恥でできた

私なのだ、と

三好叙子のぶこ

華やかさのなかで

さびしくなる

癖

思春期みたいな自分に

笑えてくる

八木大慈

日頃

代理で済ましていると

本人の出席が

まるで

代理の代理みたいだ

漂彦龍ひょうりゆう

十六世紀の

西班牙スペインの

異端審問官に似た

鏡の中の

冷やかな眼

樹実いつき

これもそれもあれも

全部「私」

何で一つに絞ろうとするの

逃げ場はたくさん

あったほうがいいじゃないか

杉山佳久

私は……生きる  
の間に入れる言葉を  
探して  
この歳まで  
まだ見つからない

風祭智秋<sup>ちあき</sup>

月も私も  
けっして光の届かない  
永久影を抱えている  
生から解き放たれる瞬間に  
光射すことを信じて

かおる

入道雲の  
迫力が欲しい  
押さえきれない  
この欲望を  
表現するために

村松清美

誰か  
書いてよ  
私の「トリセツ」  
私は私が  
わからない

中島さなぎ

自己満足

自己嫌悪

自己憐憫

不規則三日ローテーション

自己管理できず

一千万年後

ぼくは

土に還る

土偶になって

青空を仰ぐ

山崎  
光

漂彦龍

嘘をつかないように

閻魔の前で

黙秘権を行使したら

どうせ無用と

舌を引っこ抜かれた



卷二  
春

泉 ひろ子

あっちでもコックリ  
こっちでもコックリ  
ねむりの国へ  
春は  
コックリ電車

夢 助

開かれた日傘が  
坂道をズルズルズルズル  
一人でに駆け上がってくる  
さしていたのは  
春風小僧だった

山本淑子

畑土につっこんだ  
手の心地よさ  
地上だけが  
まだ  
冬か

窪谷 登

白と黒  
わずか二色で  
美  
存在感は  
四月富士

風祭ちあき智秋

春が一步進めば  
冬は二歩後ずさる  
我が信州に  
羽根雪  
舞う

篠原哲夫

シラサギで  
小径が  
真っ白になった  
忘れられない  
春の色

中山まさこ

ころころ  
ころころ  
花びらが  
改札口を通っていく  
これから北上いたします

草壁焰太

浅緑と  
桜の  
見分けがつかないほど  
淡い  
四国の春

福田雅子

用水路を  
流れる  
水の音が  
半音上って  
春が来る

とりす

こんなが悪い  
世の中に  
なったのに  
また爽やかな  
春がきた

上田貴子

梅の木に  
花の数ほど  
咲く雀  
にぎやかに  
おしゃべり日和

泉ひろ子

ほしかった  
白いまな板で  
春キヤベツきざむ  
白い音が  
うれしい